

〔研究ノート〕

# 世田谷区における協働プロジェクト活動について

—「芸術散歩」・「商店街東奔西走！」・「チョコレート映画祭」を事例に

福田 淳子

Collaborative Project Activities in Setagaya Ward:  
Achievements of “Art Walk,” “Shotengai Tohon Seiso!,” and “Chocolate Film Festival”

Junko FUKUDA

Established in 2003, the Department of Contemporary Liberal Arts in Showa Women’s University is a department in which students acquire a broad education through interdisciplinary learning.

Students acquire basic knowledge and methods that will allow them to understand society from a variety of perspectives in the first-year compulsory subjects. In subsequent years, students deepen their studies while focusing on their specializations, and finish by writing a graduation thesis. They acquire the ability to communicate and transmit specialized knowledge by developing Japanese skills, computer skills, and the ability to read and understand sociological data. Using the broad knowledge obtained in study groups, they take part in projects with local people to identify social issues and find ways to solve them.

This study note records three projects of which the author was in charge: “Art Walk of Setagaya,” “Shotengai Tohon Seiso!,” and “Chocolate Film Festival,” and explains how she, a literature teacher, implemented and guided them and analyzes the effects of the projects and their significance.

*Key words: collaborative project activities (協働プロジェクト活動), Setagaya (世田谷), Department of Contemporary Liberal Arts (現代教養学科), interdisciplinary (学際的), arts and culture (芸術文化)*

## 1. はじめに

2003（平成15）年に開設した昭和女子大学現代教養学科は、社会科学分野を中心とした学際的な学びで教養を身につけ、複雑化する現代社会の諸問題を的確に捉える判断力を磨き、社会の変化に柔軟に対応しながら社会と積極的に関わることのできる学生を育てることを目標に掲げてきた。1年次の必修科目「みる目」シリーズ—「社会をみる目」「経済をみる目」「環境をみる目」「文化をみる目」「世界をみる目」「メディアをみる目」—で社会を多角的に捉えるための基礎的な知識や方法を身につけ、学年が上がるにしたがって専門を絞りながら学びを深め、集大成として卒業論文を執筆して卒業する。同時に、専門性を社会で運用する実践的な知に近づけ、発信

力や分析力を高めるために、日本語や情報、社会調査関連科目などによってスキルやリテラシー能力を磨き、さらに地域社会や企業とのプロジェクト活動などによる実践を通して現代社会の課題を見定め、企画立案・運営により課題を解決するための学びを深めている。社会の変化に伴い、カリキュラムの見直しを必要に応じて行ってきたが、これらの学びの根幹は変わっていない。

筆者は学科における「文化」部門を担当し、1年次必修「文化をみる目」の講義を行ってきた。広義の文化として、歴史や伝統を視野に入れながら現代文化を解釈し、国や企業、地域の文化に対する取り組みを考察、狭義の文化では文学・美術・映画などの芸術文化からアニメや漫画などのポップカルチャーまでを視野に入れて、社会との関わりの中で文化

を学問的に捉える方法などを講義してきた。専門科目では特に、自身の研究分野である文学や映画を対象とした「文学と社会」「映像と社会」などの表象文化関係の講義科目を担当している。また、専門を活かしながら、学科や昭和デザインオフィス（現、現代ビジネス研究所）におけるプロジェクト活動にも関わってきた。

ここでは、文学を専門に研究し文化系の科目を担当してきた筆者が学科でどのようなプロジェクトを担当し、「文化」を学んだ学生たちがその実践として世田谷地域でどのような活動を行い、どのように学びを深めたのか、過去のプロジェクト実践例を振り返りながら、その成果について考察を加え、プロジェクト活動の意義について明らかにしていく。

## 2. 世田谷区 文化・国際課（現、生活文化政策部 文化・芸術振興課）との協働実践例

### (1) 世田谷区における文化活動

公共政策としての文化政策を概観するとき、1980年代のハコモノ建設先行の失敗から改善が進められてきた文化政策は、2001（平成13）年「文化芸術振興基本法」の制定によって漸く法整備がなされ、2012（平成24）年には「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」を制定、文化的事業そのものの活性化や質の向上とともに、文化による地域活性化、そのための人材育成や地域コミュニティを意識した活動等、改善が幅広く意識されるようになった。また、1990年代後半になると、コンピューターや携帯電話などメディアの進化・普及に伴い、情報化やグローバル化の波に乗って文化状況は大きな変化を遂げる。特に、日本においてはマンガやアニメーション、ゲーム等のメディア文化に著しい特色を発揮し、国はCool Japan 戦略を政策として打ち出した。これまで相容れない関係にあった文化芸術と経済との関係は一転し、経済活動においても外交においても、文化は欠かせない存在となったのである。

さらに、少子高齢化やグローバル化等の社会的変化、何よりも2020（令和2）年7月～9月に予定されていた東京オリンピック・パラリンピック開催を視野に、「文化芸術立国」の実現を目指すとともに

観光やまちづくり等を通じた文化芸術の新たな価値創出を図るため、「文化芸術振興基本法」は2017（平成29）年に「文化芸術基本法」へと改正された。ところがその間、バブル期前後に建設された劇場やホールの老朽化が進み、オリンピック・パラリンピック開催に向けた改修や改築により深刻な会場不足となる「2016年問題」が起きた。それが解消に向かい、いざ開催という局面になって、新型コロナウイルス感染拡大により延期となり、多くのイベントが中止や延期という新たな危機に見舞われたのである。

現在の文化状況については別稿に譲るとして、近年の地域活動においては、国主導の文化政策から、産業界（民間企業）、学校（教育・研究機関）、官公庁（国・地方自治体）、民間（地域住民・NPO）の連携の重要性が強調され、地域資源を活かした個性的で持続可能なまちづくりが目指されるようになってきている。

こうした変化に伴い、大学教育においてもまた、地域や企業との連携によるプロジェクト活動やPBL（Problem Based Learning）が増加傾向にあるのは周知のとおりである。昭和女子大学では、2014（平成26）年4月に地域連携センター（2016年4月より昭和リエゾンセンター、2020年10月より現代ビジネス研究所に統合）の開設、大学所在地である世田谷区との包括協定締結（2014年5月）により、世田谷区における多様な活動が展開されてきた。

世田谷区における文化活動は、2006（平成18）年3月に「世田谷区文化及び芸術の振興に関する条例」が制定され、同条例第3条に基づき「世田谷区文化・芸術振興計画」（2007年度から2009年度）を策定、「心潤う、文化・芸術のまち 世田谷～文化・芸術に親しみ、魅力を発信する」ことをめざし、生活文化政策部 文化・芸術振興課が活動を推進、「芸術アワード」・「世田谷芸術百華～せたがや文化プログラム～」等の支援を行っている。また、質の高い文化・芸術の展開と区民の自主的な文化創造活動の支援を目的として2003（平成15）年には「せたがや文化財団」（2011年に公益財団法人）が設立されており、舞台・音楽・生活デザイン・国際交流・美術・文学の6分野それぞれが専門性を活かした文化芸術活動の提供・支援を、世田谷パブリックシアター、

世田谷美術館、世田谷文学館等の施設を中心に行っている。これらの公的機関を背景に、民間・NPO 団体・教育機関などが、個別に、あるいは連携を取りながら、様々な文化活動を展開してきた。

筆者が現代教養学科の学生とともに世田谷区と協働した最初の活動事例として、2012（平成24）年の世田谷区制80周年記念行事の一つ「世田谷芸術百華2012」への参加がある。「世田谷芸術百華」とは、世田谷区とせたがや文化財団とが主催する秋のアート・イベントで、美術館や文学館などの拠点施設を離れ、まちかどや商店街・地域のホール・公園など、区内各地で多彩な催しを行っている。区民が身近な場所で気軽に文化・芸術に触れる機会として毎年9月から11月にかけて「三茶 de 大道芸」・「まちかどコンサート」・「アートフリマ」など複数のイベントが継続的に開催されてきた。

世田谷区には10校以上の大学・短期大学があり、インターンシップや講座等で区と連携した取り組みを行っている。しかし、文化・芸術分野での関わりが少なく、大学生世代に区の文化や芸術、歴史により親しんでもらう企画がほしいということで、世田谷区文化・国際課（現、生活文化政策部 文化・芸術振興課）から本学科に相談があった。具体的には、これまでバスツアーで開催していた文化的な散策イベントに代わり、アートをテーマに徒歩で散策する企画を考えてほしいとのことだった。筆者が担当する「メディア表象論演習」（3・4年対象のゼミナール）では、文字や映像などで表象されたものを対象に、社会との関連の中でその意義や影響関係について考察している。ゼミで学んだことを地域活動で活かす、PBLの実践として有意義な活動になるであろうことを確信し、世田谷区・株式会社世田谷サービス公社・本学の3者で企画を進めたのが「せたがや芸術散歩」と名付けた以下のコースである。コース1に関しては当学科の鶴田佳子准教授が担当、コース2、コース3を筆者のゼミが担当した。

\*コース1「小さい秋をみつけて楽しむ旅～散歩ワークショップ～」

\*コース2「映像の進化を見る！～過去から未来へ～」

\*コース3「文学者が築いた“社会”との絆を探る～“アナログ”と“デジタル”の魅力～」

## (2) せたがや芸術散歩 コース2「映像の進化を見る！～過去から未来へ～」(2012年11月17日(土))

世田谷区内には東宝撮影所や国際放映など歴史ある撮影スタジオがあり、一方で映像の最先端技術を研究開発するNHK放送技術研究所が存在していることから、この企画を提案した。当初は、世田谷の演劇や映画について、“舞台裏”をキーワードに、劇場の舞台裏や映画の制作現場などを知ること、鑑賞者とは別の角度から文化を捉えたいとの考えもあった。日本の演劇や映画などのメディア芸術は、優れた文化力として世界各国から注目されており、我が国の経済活動や国際関係を支える大切な活動ともなっていることは既に述べた。その発信拠点である劇場や歴史ある撮影所が世田谷区内には存在し、通常は見ることでできない、劇場の舞台裏や映画製作の現場などを見学することで、演劇や映画の新たな楽しみ方を発見するというコンセプトに企画を試みた。また、あまり知る機会のない、スタッフの技術的な事柄や裏方の仕事などに目を向け、文化・芸術をより身近なものとして捉え直すことができると考えた。世田谷パブリックシアターでは、上演中の舞台装置などの見学も含めたバックヤードツアーを開催しており、ゼミで見学に参加した経験があった。

学生とともに夏期休暇中にコースの下見を実施、施設との交渉には教員があたり、見学コースを固めた。結果的には、演劇関係施設として三軒茶屋（世田谷パブリックシアター、シアターラム）・下北沢（本多劇場ほか）を候補に挙げたが、時間的・距離的な問題があったことからコースに組み込むことができなかった。また、映画関係施設として東宝撮影所が候補に挙げたが、SNSの発達によって以前よりも撮影所の情報管理が厳しく、見学の許可が得られなかったため断念せざるを得なかった。ネット社会の欠陥を意外なところで実感することになった。しかし、正門付近で説明だけを聞く予定が当日の雨天により、使用していないスタジオで説明を聞く幸

運に恵まれ、撮影現場の雰囲気を楽しむことができたのである。

撮影所以外の映像関係施設として、世田谷区砧には我が国唯一の放送技術分野を専門とする研究機関「NHK 放送技術研究所」がある。次世代放送メディア、インターネット活用技術、インテリジェント番組制作、ユニバーサルサービス、放送用デバイス・材料など、基礎から応用まで幅広い研究開発に取り組み、映像の最先端技術を生み出している施設である。こちらも通常は一般公開されていないが、スーパーハイビジョンの映像視聴、音響無響室の見学、研修用模擬スタジオでのアナウンスやテレビカメラの操作体験などを、施設の協力によって行うことができた。

当日の行程は次の通りである。参加者には、学生が作成した手作りのパンフレットを当日資料として配付した。

成城学園前駅にて集合。「成城散歩」のスイーツを提供→清川泰次記念ギャラリー（施設前で簡単な説明）→東宝撮影所ゴジラ像前（東宝・富田氏による撮影所の説明）→大蔵団地→東京メディアシティ→NHK 放送技術研究所（到着後、担当者による館内案内およびスタジオ模擬体験を実施）、見学後解散

### (3) コース3 「文学者が築いた“社会”との絆を探る～“アナログ”と“デジタル”の魅力～」 (2012年11月24日(土))

世田谷区内には数多くの文学者が住み、世田谷を舞台とした作品も多く残されている。また貴重な資料を蔵する文学館や資料館があり、作家と縁のある場所なども保存・継承されている。若い世代をはじめ多くの方々にこれらのことに関心を持って欲しいとの発想から、文学に関連したテーマを設けた。

大宅壮一文庫、賀川豊彦記念松沢資料館、蘆花恒春園は場所が近接していることからまず候補に挙げ、大宅壮一・賀川豊彦・徳富蘆花の3人とも“社会”と深い関係を持って活躍した人物であるという共通点を学生が明らかにしていた。

ジャーナリスト・ノンフィクション作家として活躍した大宅壮一（1900（明治33）年9月13日-1970

（昭和45）年11月22日）は、読了後すぐに廃棄されてしまう雑誌にこそ社会的価値があると考え、心血を注いで収集し、それらをもとに1970（昭和45）年に大宅壮一文庫が設立された。週刊誌やマンガ雑誌、ファッション雑誌など、広範なジャンルにわたって収蔵する国内唯一の雑誌専門図書館であり、手作業で作られる雑誌記事索引に特色がある。まさにアナログの大切さ、雑誌の重要性を実感させてくれる図書館である。

一方、賀川豊彦（1888（明治21）年7月10日-1960（昭和35）年4月23日）は、青年時代は神戸のスラムに住み込んで貧困問題に取り組み、壮年時代には労働組合運動、農民運動、協同組合運動を行い、関東大震災時には罹災者救済活動やセツルメント事業に尽力した、キリスト教社会運動家である。その間、小説や随筆、評論など執筆活動も行い、小説『死線を越えて』はミリオンセラーを記録した。賀川豊彦記念松沢資料館は、賀川が活躍した時代の記録映像や所蔵資料などをアーカイブズ資料として保存し、未来への情報伝達を考える先端的な資料館であり、デジタル資料の必要性和重要性を再確認させてくれる。コースの副題を「“アナログ”と“デジタル”の魅力」とした所以である。

徳富蘆花（1868（明治元）年10月25日-1927（昭和2）年9月18日）は、『不如帰』で知られる小説家で、思想家・ジャーナリストの徳富蘇峰は兄。17歳でキリスト教の洗礼を受け、伝道や英語教師の経験もある。1907（明治40）年に現在の世田谷区粕谷に転居し、死去するまで半農生活を送った。1936（昭和11）年に蘆花夫人により、広大な土地・家屋の一切が東京都に寄贈され、敷地内には夫妻が過ごした家屋が保存され、蘆花恒春園として親しまれている。

当日は八幡山駅に集合し、コース1と同様、地元のスイーツをお土産に渡し、学生手作りのパンフレットを当日資料として配付、大宅壮一文庫の見学からスタートした。普段は非公開の書庫を順番に見学し、図書館についてレクチャーを受け、賀川豊彦記念松沢資料館では賀川の活動をまとめた映画を鑑賞し、賀川や資料館に関する説明を受け、館内を見学した。その後、蘆花恒春園に向かい、屋敷内で蘆花

研究者からレクチャーを聞き、その場で〈ピクニックランチボックス〉の昼食とした。これは、世田谷美術館カフェと本学科学生が協働でテイクアウト用に企画（鶴田佳子准教授・粕谷美沙子准教授指導）したものである。そのあと世田谷文学館に移動し、開催中の斎藤茂吉展について担当学芸員から説明を聞き、見学は自由、解散とした。

#### (4) アートネットワーク会議

「アートネットワーク会議」とは、毎年12月に世田谷区内で文化・芸術活動をする区民や団体、民間の文化施設、大学、アーティストなどが、その年の活動報告を行い、情報交換やネットワークづくりを行うきっかけの場として開催されているイベントである。世田谷に点在する文化施設など様々なジャンルの資源を、文化やアートを切り口に結びつけた“芸術散歩”の事例として、担当教員の鶴田・福田から、企画検討段階からコース企画の意義などについて解説、参加学生からはイベント当日の様子についてそれぞれのコースの報告を行った。プログラムは以下のとおりである。

アートネットワーク会議 2012 2012年12月8日（土）  
三軒茶屋キャロットタワー4階ワークショップルームB

第1部 昭和女子大学 現代教養学科の学生による事例発表 12:00～

テーマ：アートを切り口としたせたがやの魅力  
～せたがや芸術散歩編～

- (1) 昭和女子大学プロデュース せたがや芸術散歩とは？ 昭和女子大学現代教養学科 准教授 鶴田佳子／昭和女子大学現代教養学科 准教授 福田淳子
- (2) 「せたがや芸術散歩」コース1 小さい秋をみつけて楽しむ旅～散歩ワークショップ～
- (3) 「せたがや芸術散歩」コース2 映像の進化を見る！～過去から未来へ～
- (4) 「せたがや芸術散歩」コース3 文学者が築いた“社会”との絆を探る～“アナログ”と“デジタル”の魅力～

第2部 交流会 13:30～

テーマ：もっと話そう！ もっとつながろう！  
世田谷のアート！！

#### (5) 考察

当時の学生たちの反省を振り返ると、夏休みを利用して実際のコースを歩き、雨天対応のコースなども考えていたことは評価できる点であり、施設や関係人物の調査に手間取り当日配付用のパンフレット作成に時間がかかったことがマイナス点であった。当日の反省点としては、見学場所での時間管理が難しかったこと、役割分担が徹底できていなかったこと、徒歩での移動のため自動車や自転車など安全への配慮不足等を挙げていた。しかし、世田谷区主催の徒歩での文学散歩は初めてであり、事故もなくほぼ時間通りに解散ができ、個人では立ち入りが難しい場所や解説付きの案内など、学生の手作り企画に対する参加者の満足度は高く、一定の評価は得られた。

筆者にとっては、この活動が初めての地域との連携活動であったため、全てが貴重な経験となった。世田谷区およびその活動の把握、外部機関との協働活動や学生との共同作業のノウハウなど、プロジェクト活動の基礎となる事柄を、様々な角度から学ぶことになった。

たとえば、世田谷区の文化については授業でも多少扱っているため、活動については把握しているつもりであったが、区内のイベント等を紹介した印刷物が複数出されており、全ての把握には至っていなかった。

また、学生との活動を通して困難を感じたのは、①アルバイトや習い事、クラブ・サークル活動をする学生が多く、スケジュール調整に時間を要すること、②学際的な学科であるがゆえのデメリットがあること、である。①は学生との活動には避けられない問題である。メンバーが多ければ多いほど全員揃っての活動は困難であり、グループに分かれての活動にならざるを得ない。全体での情報交換、グループの連携が重要になる。②については、文学や英語などの専門を深く掘り下げる学科とは異なるため、特にコース3の配付資料を作成する段階では時間を要した。一般の方への配付物であるため、大学生として最低限の質は保ちたい。パンフレット作成には、情報収集とその処理能力、デザイン力・編集能力、日本語力・語彙力など、様々なスキルが要求される。

また、馴染みのない文学者に対して、どのように興味・関心を引き出すかも課題であった。社会との関係性が深い作家だったため、社会的活動を糸口でできたのは幸いであった。学生にとっては慣れない作業ではあったものの、教員の添削を繰り返して完成させることができた。

専門的な部分での浅さは否めないにしても、社会や文化とのかかわり、まちづくりなど、様々な角度から関心を持って取り組むことができたことは評価できる点である。社会科学を中心に学際的に学ぶ学科だからこそのコース設定であり、学科のメリットとデメリット、両面を浮き彫りにさせた活動となった。

芸術散歩顧問としてアートネットワーク会議に参加できたことは、世田谷区内あるいは近辺の芸術活動関係者の方々と対話をする貴重な機会となった。この会議が機縁となって能楽師の浅見慈一氏には本学科特殊研究講座を担当いただいた他、せたがや文化財団世田谷文化生活情報センター 生活工房・音楽事業部・パブリックシアターの方々とはその後もゼミ活動やプロジェクト活動などで継続的な交流がある。

### 3. 現代教養学科とエフエム世田谷、昭和信用金庫との活動

#### (1) 活動内容

筆者が現代教養学科の学生とともに授業以外で世田谷での文化活動を開始することになったきっかけは、エフエム世田谷のラジオ番組制作である。昭和女子大学が文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」(GP)に採択され、その活動の一つであるコミュニティサービスラーニングの実践として2006年から2009年まで子育てに関わる方々に向けた15分間の情報番組『子育てまナビ! プロジェクト』の制作を現代教養学科の学生が担当、筆者はその顧問を務め、アドバイスを行った。GP終了後はその活動を発展的に継承し、ラジオ番組制作を中心としたクラブ活動「grow あっぶ SETAGAYA」を立ち上げた。学生たちは身近な話題から時事問題に至るまでテーマを設けては、区内の施設や各種イベント等で取材し、部員同士で議論しながら台本作

りを行い、音源の編集から本番のパーソナリティまで務め、オンエアを全員でチェックして反省を行い、次の活動に繋げる、ここまでを一連の流れとして活動していた。

その後、エフエム世田谷は(株)世田谷サービス公社に吸収合併され、経営方針の変更とともに大幅な番組改変があり、学生主体の番組枠が無くなるという経緯があった。昭和女子大学は世田谷区と包括協定を結び、産学連携のプロジェクト型インターンシップとしてエフエム世田谷「商店街東奔西走!」番組制作プロジェクトを開始全学科の学生を対象に6名程度を募集し、筆者は2015年4月から2019年3月までの5年間顧問を務めた。「プロジェクト型インターンシップ」は、企業との協働プロジェクトであると同時に、インターンシップとして単位取得が可能であり、そのため企業での研修など学びの側面を計画的に盛り込んだ内容となっている。

現在も継続中の「商店街東奔西走!」(毎週金曜日14時50分~15時00分)は、世田谷区北沢に本店を置く昭和信用金庫の神保和彦理事長がホストを務め、世田谷区内の商店街や地域に関係する方々をゲストに、対談形式で仕事や地域活動を紹介する番組で、12月と2月放送分の番組制作を本学の学生が担当した。まず昭和信用金庫やエフエム世田谷の仕事内容、地域における存在の意義や役割等について調べることからスタートし、昭和信用金庫では内部見学ののち金融の仕事に関する研修を受け、エフエム世田谷ではラジオのトークや編集等の基礎的な技術研修を受ける。対談のゲストが決定次第、相手方の仕事内容や地域での活動内容を調査し、インタビューを実施する。それをもとに番組の台本を12月と2月で合計8回分作成、収録に臨む。収録では、学生もトークに参加し、機械の操作も行う。収録後は音源の編集作業を行い、オンエアを聞いて振り返り、締め括りとしてプロジェクト報告会に参加した。内容が多岐に亘り、多くの技能が要求される、高度で充実した内容であった。

#### (2) プロジェクトの目的と成果

学生たちは、インターンシップの側面からは、地

域に根ざす金融機関である信用金庫と、地域の情報発信基地である地方ラジオ局について、その役割や意義を考え、具体的な仕事内容を学んだ。昭和信用金庫での最初の研修では、信用金庫の仕事が銀行とは性格が異なり、地元根付いた金融機関であること、地域での活動を積極的に推進していることをまず学ぶ。2019年度の研修では、昭和信用金庫烏山支店で通常の研修を受けたあと、烏山駅前通り商店街で開催されていた夏まつりに参加、商店街の副理事長に取材を行い、商店街の歴史や現在かかえる問題点などを聞くことができた。昭和信用金庫の職員がテントで焼き鳥販売などを行い、地元の方々と活動する様子を実際に目にすることができた。他の地域でも地元の商店街を盛り上げる活動を継続的に行っており、信用金庫はまさに地域の金融機関として住民との交流を大切にしている。エフエム放送もまた、地域に根差した情報の発信基地として地元の方々に向けて地域の活動や情報を発信し、その役割を果たしていることを学んだ。

プロジェクトの側面からは、昭和信用金庫理事長がホスト役を務める対談番組の制作現場に参加することで、調査やインタビューで得た情報を精査し正しく判断することや、コミュニケーションの重要性、言葉を発信することの大切さや難しさ等を学び、メディアのあり方について多角的に考えることを目的とした活動を行った。

到達目標としては、地域と密接に関わる仕事を知り、それらが地域に果たす役割を理解する。具体的には、企業の方々と接する時のマナーやインタビューの仕方、原稿のまとめ方等のスキルを磨き、情報収集力・判断力・分析力・コミュニケーション能力等を鍛える。それぞれの立場に立って会話を導き出す文章力・表現力を磨き、話し手や聞き手を意識することの重要性を理解する。また、収録時の機材操作や収録後の編集等に必要な技術を体験することで、一つの番組がどのように制作されるのかを把握することを目指した。

募集人数を6名上限としたものの、授業等でスケジュール調整が困難であったが、多様な学科の学生が参加したため、様々な角度から意見を出し合うこ

とができた。総じて、学生たちはインタビューなどでの対人コミュニケーションでは優れた力を発揮した。しかし、多角的な視野が要求される台本作りは難しく、顧問が何度も添削を加え、粘り強い推敲を強いることになった。ゲストへの事前インタビューを活用しながら、ラジオのリスナーを想定して、ゲストの人物像や仕事内容をホストとの会話から引き出すことが必要であり、会話作りのテクニックが要求された。

本プロジェクトでは、世田谷で活躍する多様な業種の方々との出会いがあり、ゲストが世田谷において仕事や地域活動に取り組む、その内容を知ることが世田谷の歴史や文化、まちそのものを知ること直結していた。

例を挙げれば、区と区民とを繋ぐまちづくりの中間支援組織「世田谷トラスト」理事長、2004年廃校の池尻中学校をリノベーションしたIID世田谷ものづくり学校でIT企業を経営する社長、三世代にわたって世田谷に居住する世田谷梅まつり実行委員会会長などのゲストを迎え、世田谷区は都内でも空家が多いこと、逆にリノベーションで生まれ変わっている地域があること、世田谷に三世代にわたって住み続け伝統を継承しようとしている方たちがいることなど、現在に至るまでの世田谷の姿を具体的に知ることもなった。これが何よりも得がたい収穫であった。

5年間のゲストやインタビュー日時、放送日程等については、文末の【活動記録】に記載する。

## 4. チョコレート映画祭

### (1) 下北沢との出会い

上記のように、「商店街東奔西走！」の番組制作では世田谷区で活躍し地元貢献する多くの方々と出会いがあり、筆者が現在ゼミ活動を行う下北沢もラジオ番組制作がきっかけとなった。昭和信用金庫の本店は北沢にあることから、ラジオの収録は本店会議室で実施、そのたびに下北沢のまちを訪れていた。

北沢在住のゲストとして、2015年度の第1回に「しもきた商店街振興組合」副理事長を務める小清

水克典氏、2017年度の2回目には本多グループ社長の本多一夫氏がいた。

東京都には国立・都立・区立の劇場やホールが存在するものの、多くのイベントは企業や劇団が運営する民間の施設によるところが大きい。中でも、下北沢での小劇場ブームを築いた本多グループは、個性的な古着屋や飲食店・ライブハウスの多い若者文化のまち下北沢を支える大切な役割を担ってきた。本多グループは、下北沢駅周辺に100席～400席弱の8つの劇場（本多劇場、ザ・スズナリ、駅前劇場、OFF・OFFシアター、「劇」小劇場、小劇場「楽園」、シアター711、小劇場B1）を持つが、常に予約で埋まっている状況であり、本多社長によれば状況が許せば今後も劇場を増やしたいと考えているという（2017年12月8日（金）インタビューより）。北海道出身の本多氏は、子供の頃の体験がきっかけで演劇に興味を持ち、高校では演劇部の部長も務めた。20歳で新東宝のニューフェイスに合格して上京するが新東宝は7年後に倒産（1961年）、本多氏はバーの経営を始める。映画会社時代の俳優仲間が集まるバーとして繁盛し、50件もの店を持つに至り財を成した。それを元手に下北沢駅前の土地を購入、所有していた飲食店は売却してザ・スズナリを作り、次に本多劇場を創設。不動産の家賃収入で劇場を運営するという経営者に転身を果たした。芝居をする俳優のことを第一に考えて創られた本多グループの劇場は、規模的にも汎用性に優れ、演劇界になくてはならない劇場となったのである。

下北沢では、1990年から「地域に根ざした手作りの演劇祭」を目指して「下北沢演劇祭」が毎年開催されており、2020年で30回目を迎えた。本多グループの8劇場に、NPOが運営する「東京ノーヴィ・レパトリーシアター」、世田谷区立「北沢タウンホール」を加えた10劇場を会場に開かれる、公立・民間が手を携えた地域密着型の演劇祭である。主婦から学生、社会人など様々な年代が、演劇経験に関係なく参加する「演劇創作プログラム」なども行われている。下北沢商店連合会加盟の4つの商店街は、地域と演劇とを結びつけたこのようなイベントもサポートしている。

下北沢在住のもう一人のゲスト小清水氏は、下北沢駅東口を中心とする「しもきた商店街振興組合」の副理事長で、東洋興業株式会社取締役、昭和信用金庫理事でもある。形式にとらわれない柔軟な発想と新しい感覚でまちづくりに挑戦する小清水氏と、ラジオ番組を機に何か協働でプロジェクト活動ができないかと相談するうちに、ゼミの学びを活かせるプロジェクトとして映画祭の発案に至った。

## (2) チョコレート映画祭について

地震災害による地域復興を目的に誕生した「湯布院映画祭」（1976年）を皮切りに、日本各地でそれぞれの特徴を活かした映画祭が数多く開催されている。大作や短編、劇映画やドキュメンタリー、ご当地映画から自主制作映画に至るまで、ジャンルも目的も様々であるが、上映会をメインにしたものが殆どである。

「チョコレート映画祭」は、社会科学を中心に学ぶ本学科の特徴を活かした映画祭として、上映や制作発表中心ではなく、また映画を単なる娯楽としてではなく、社会との関係から内容を解釈・分析し、その結果をパネル展示して研究発表を行う、大学生らしい学びの発信の場として企画したものである。

筆者が3・4年生に向けて開講している「メディア表象論演習」では、3年前期に、娯楽と扱われがちな「文化」を対象に研究としてどのようなアプローチが可能なのか、テキストを用いて具体的な事例を挙げながら社会的な理論から方法を模索し、後期は実践的な活動に取り組んでいる。3年後期に映画研究を中心とした映画祭に取り組むことは、卒業論文執筆に向けた準備として有益な結果をもたらすことが期待できた。開催時期を2月初旬から中旬にかけて設定したため、バレンタインデーに因んで「チョコレート映画祭」と名付けた。

小清水氏が副理事長を務めるしもきた商店街振興組合はまちづくりのための会社、株式会社ハッスルしもきたを作り、その会社の収益をまちづくりのために利用する仕組みを整備しており、東京都が主催する「商店街グランプリ」でグランプリを受賞した経歴がある。商店街理事の小清水氏、久保寺敏美氏



と相談し、筆者が担当するゼミの学生と、まちづくり会社が所有する空間を利用して、協働プロジェクトとして映画祭を開催することに決定したのが2015年であった。映画祭のために提案された空間はまだ整備途中で、演劇などの稽古場として利用されていた東洋興業ビルの3階スペースと、同じビル1階の久保寺氏経営のカフェEXPRESSER前側にあるウッドデッキ部分であった。

与えられた空間をどのように活用しイベント開催に繋げたのか、以下に映画祭の内容を具体的に記し、考察を加えていく。

## ■第1回「チョコレート映画祭2017」 (2017年2月11日・2月12日)

### ①概要

- ・参加学生：3年ゼミ生11名
- ・テーマ：「あなたとチョコレート」
- ・研究対象映画：『ショコラ』『チャーリーとチョコレート工場』
- ・上映映画：『チャーリーとチョコレート工場』
- ・来場者数：約200名

※昭和デザインオフィス認定プロジェクトとして実施

協働プロジェクトの第一歩として、昭和デザインオフィス(当時)のプロジェクトに筆者が応募し、昭和女子大学の認定プロジェクトとして活動を開始した。

“下北沢”にチョコレートをきっかけに人を呼び込み、チョコレートをテーマにした映画で様々な角度から社会について考える機会を作り、研究発表で“まち”が所有する空間をデザインし、イベントでまちの“人の動きをデザインする”ことを目的に掲げた。商店街の方々とのミーティングや会場の下見を何度も繰り返し、パネルの展示枚数や展示方法、会場レイアウト、参加型イベントなど、試行錯誤しながら決定して行った。ガラんとした3階の空間をどのように利用し、1階と3階の二つの空間をどう結びつけるか、担当者をどう配置するかということが大きな課題であった。

映画上映については、3階の壁が真っ白だったた

め、学科のプロジェクターとパソコンを持参して、壁に投影することで解決できた。

展示は『チャーリーとチョコレート工場』と『ショコラ』それぞれの作品についてのパネルを3枚ずつ作成し、1枚目は映画の制作年や監督・キャストや受賞歴などの基本情報、あらすじや登場人物関係図などを記し、2・3枚目では映画の特色を掘り下げ、映画に登場するチョコレート菓子の種類や、チョコレートが登場人物とどのように関係しているか、物語の展開にどのようにチョコレートが関わるのかを分析した。『チャーリーとチョコレート工場』では、1作目とリメイク作品で共通して登場する歌の歌詞を比較し、統計を用いたデータ分析などを行った。

広報に関しては、事前にチラシを作成、秋桜祭やオープンキャンパスで配布したほか、下北沢周辺の店舗などに設置を依頼した。当日は、学生からの「あいさつ」、上映作品解説、展示解説を掲載したパンフレットにアンケートを挟み込んで配布し、終了後に集計をし、振り返りに用いた。

以下に、パンフレット内容を記す。

#### ごあいさつ

私はフォンダン・ショコラが好きです。切ったと同時に流れ出る香り豊かなチョコレートが生地に染み込んで、舌の上で溶けていきます。甘くて苦い深みのある味わいに私は翻弄されっぱなしです。その艶やかな姿はどこか色っぽくもあり、私の視覚まで魅了するかのようです。／そんな見た目にも美しいチョコレートは、多くの映画の中で人々を魅了するスイーツとして描かれてきました。数ある映画の中から今回私たちが選んだのは『チャーリーとチョコレート工場』と『ショコラ』の2作品。映画の登場人物たちは、チョコレートを愛し、時には憎み、チョコレートに対するそれぞれ違った思いを抱えています。彼らにとってチョコレートは、ただのスイーツではないのです。私たちはこの映画祭で、彼らの甘くて苦い思いを読み解き、展示にまとめました。今回の映画祭のテーマでもある「あなたとチョコレート」。／あなたにとって「チョコレート」とはなんですか？

#### タイムテーブル

2.11. Saturday

13:00 開場

18：00 閉場

2.12 Sunday

13：00 開場

15：00 『チャーリーとチョコレート工場』上映

17：00 上映終了

18：00 閉場

上映作品

『チャーリーとチョコレート工場』

監督：ティム・バートン 主演：ジョニー・デップ

2005年に公開された大ヒット映画。鬼才ティム・バートンとジョニー・デップの名コンビがお送りするファンタジー映画です。／ウィリー・ウォンカのチョコレート工場にはワクワクがいっぱい！ チョコレートの滝、噛むほど味が変わるガム、賢いリスたち、テレポーテーション、そして、ガラスのエレベーター。／しかし工場に招待された子どもたちを待っていたのは楽しいことばかりではなく――。楽しくて無茶苦茶でちょっぴり怖くて不思議な世界から、一瞬たりとも目が離せない！ ちなみに、ジョニー・デップが好きなチョコレートは、幼いころから馴染みのあるセミ・スイートのダークチョコなんだとか。

展示紹介

日曜日に上映する『チャーリーとチョコレート工場』と、チャーリーと同じくジョニー・デップが出演している『ショコラ』という映画について研究、考察しました。／このチョコレート映画祭のテーマでもある「あなたとチョコレート」についてをメインに、映画に描かれているチョコレート、ひいてはその「甘さ」と「苦さ」を探っていきました。

『チャーリーとチョコレート工場』

『チャーリーとチョコレート工場』が公開された当時、私たちはまだ小学生でした。振り返ってみると、ただ「面白かった」という人と、「怖かった」という人がいることに気が付きました。そこで私たちは『チャーリーとチョコレート工場』におけるチョコレートの意義を考えるとともに、この映画の「怖さ」や「苦い部分」について考察を行いました。／映画を鑑賞し、なかでも重要な意味を持つと思われた、／①ウンパルンパたちの歌の歌詞、／②二人の主人公であるチャーリーとウォンカそれぞれにとってのチョコレート／という2点を中心に議論し、まとめました。／また、原作本と1回目の映画作品でもある旧映画版にも触れ、比較することでより理解を深めていきました。／明る

く楽しい夢のような映画という印象が強い本作ですが、改めて見返すとなかなかエッジの効いたネタも多く、子供の頃の記憶とは違う楽しみ方も出来るかも……？

『ショコラ』

2000年に公開されたラッセ・ハルストレム監督のアメリカ映画。アカデミー賞5部門にもノミネートされた作品です。／この映画の登場人物たちは、良くも悪くもチョコレートによって運命を動かされます。私たちが『ショコラ』を題材とした決め手はここにあります。様々な事情を抱えた人たちが、チョコレートに対する様々な思いを抱えているのです。まさしく「あなたとチョコレート」。チョコレートが人々をつなぎ、チョコレートが生む人間模様を受け手に伝わりやすく表現しています。／展示には、チョコレートと登場人物についての考察、アンリ神父の説教についての考察を行い、作中に出てくるチョコレートをまとめました。／タイトルからもわかるように、この作品はチョコレート抜きでは語れません。人と人をつなぐ魔法のチョコレート、お店に並ぶ姿には思わずうっとりしてしまいます。是非、作中に登場するチリペッパー入りホットチョコレートドリンクもお試しくください。「甘い」チョコレートに、心も身体もあつたまること間違いありません。

## ②考察

まず人を呼び込むきっかけとして、1階デッキ部分で参加型イベントを開催、映画祭のテーマ「あなたとチョコレート」に合わせてチョコレートにまつわるエピソードの記入を呼びかけ、記入後にホット・チョコレートをプレゼントした。デッキ奥のカフェでは、学生と久保寺氏経営店のパティシエが相談して考案した、映画に関連するオリジナル・ホット・チョコレートの販売も行った。1階の無料のホット・チョコレートで足を止めてくれる方に3階の展示会場をアピールし、担当者が誘導するという連携を図った。映画祭ロゴを作り、学生たちは揃いのロゴ入りエプロンを付けて対応、ロゴ入り缶バッジなどの配付も行った。

メインである映画研究では、チョコレートの“Sweet”な面ばかりでなく“Bitter”な面、たとえばカカオ生産にまつわる児童労働やジェンダー問題などの社会問題を考え、上映作品の物語分析や映画に

おけるチョコレートの意味や役割などを考察してパネル展示した。

第1回ということで全てがチャレンジであった。実施時期の問題として、学科の行事などが重ならず、授業や試験が終了する2月が候補に挙がり、学びを反映できて、かつ多くの人と議論がしやすい身近なメディアとして映画を選択、2月といえばバレンタインデー、そこで選んだのがチョコレートである。チョコレートをテーマに何かできないか、ということでチョコレートに関係する映画を検索、まず候補に挙がったのが『チャーリーとチョコレート工場』、『ショコラ』であった。全員で視聴し、チョコレートは甘くて美味しいだけではない、苦くて辛いこともある、BitterとSweetのキーワードで、社会的なアプローチが可能ではないかとの考えに至った。

個人的なBitterとSweetから、社会的客観的なBitterとSweetを考えるために、ドキュメンタリー映画上映という発想もあった。独立行政法人国際協力機構によれば、「ガーナではおよそ5人に1人の子どもが児童労働に従事している」。そこで辿り着いたのが、世界の児童労働の撤廃と予防に取り組むために1997年に学生5人で設立したという国際協力NGO団体の「ACE」である。2009年からガーナで活動を始め、子どもたちを児童労働から守るために、教育環境の改善や農家の互助システム構築などを通じて協力を続けている。国内では、児童労働やCSR、フェアトレードなどをテーマに、教育現場や一般向けに講師派遣や出前授業を実施している。また、日本のチョコレート業界は「日本チョコレート・ココア協会」を通じて世界的な組織に参加していることも見えてきた。森永製菓株式会社はNGOのプラン・インターナショナルやACEとの協働で、売り上げの一部をカカオ生産国の支援に当てている。

ACEは、設立15周年を記念して2012年に映画『バレンタイン一揆』を制作した。ガーナのカカオ生産地を訪れて児童労働問題と向き合い、バレンタインデーにフェアトレードでつくられた真実の愛あるチョコレートを選んでほしいという思いを胸に活動する女子たちの奮闘記である。ACEに連絡を取

り、そのDVDをゼミで視聴し、上映や勉強会などの開催も検討した。映画祭の趣旨を考えて上映には至らなかったが、カカオ生産にまつわる児童労働や貧困問題など、チョコレートの裏側を知ることで視野を広げ、まさにBitterとSweetの世界が存在することを、全員が共通認識として持つことができたのである。

映画研究として『ショコラ』『チャーリーとチョコレート工場』の2作品を取り上げ、上映には『ショコラ』を当初は選んでいた。しかし、直前になって著作権(上映権)が切れて上映不可となったとの連絡を受けた。映画の上映にあたっては、賃貸料や上映権の変更など、様々な問題が発生するものであることを顧問として学んだ回であった。

来場者は2日間で約200名、アンケートの回収率は約4割であった。

「昭和女子大生が映画祭をやってます!」の声を聞きつけて、本学の卒業生や、4月から入学予定の家族連れが来場するなど、予想外の展開があった。受験生や親世代の方々からは、大学のゼミがどのような学びをするのか理解できた、という声も耳にした。

夏休み以降は学園祭やインターンシップなどもあり、作業が停滞することも多かったが、学生がゼロから立ち上げ、ゼミが企画運営した初めてのプロジェクト活動としては予想を上回る結果で、展示に関する反響も良かった。2箇所に分かれた会場を繋ぐために知恵を絞り、アンケートの集計や分析など最後までやり遂げ、ゼミのメンバー同士の結束も深まった。商店街の方々とのやりとりの中で、社会人とのコミュニケーションを経験することにもなり、実りの多い貴重な学びの機会となった。

## ■第2回「チョコレート映画祭2018」 (2018年2月11日・2月12日)

### ①概要

- ・参加学生: 3年ゼミ生9名
- ・テーマ: 「愛」
- ・研究対象映画: 『湯を沸かすほどの熱い愛』『リリーのすべて』『最強のふたり』『素晴らしきかな、人生』

- 上映映画：『素晴らしきかな，人生』
  - 来場者数：約 250 名
- ※昭和デザインオフィス認定プロジェクトとして実施

第1回と同様，しもきた商店街振興組合ほかとの協働で，バレンタインデー直前の連休を利用し，“愛”をテーマにした映画祭を2日間にわたって開催した。場所，内容，コンセプトとも，1回目とほぼ同様で，「チョコレートをきっかけに人を呼び込み，映画によってまちの空間や人の動きをデザインし，様々な角度から“愛”について考える機会を作る」ことを目的とし，映画の研究発表と展示発表，上映会を行い，併せて参加型イベントを行った。

1度目と大きく異なった点は，3階の会場が，舞台付きの小劇場「しもきた DAWN（ドーン）」に生まれ変わったことだ。照明や音響の設備も整い，楽屋もでき，スクリーンやプロジェクターも設置された。

映画研究については，1回目ではチョコレートにこだわった映画を選んだが，バレンタインデーに因んで広く「愛」をテーマにした作品を対象とし，恋人同士の愛だけでなく家族愛・夫婦愛・同性愛・友情など様々な形の「愛」について，社会との関連を視野に入れながらストーリー分析・行動分析などの考察を行った。会場に舞台ができたため，パワーポイントを使用した口頭発表を行うことにし，グループに分かれて作品研究を進め，1日目には『リリーのすべて』・『湯を沸かすほどの熱い愛』・『最強のふたり』についてそれぞれの担当者がプレゼンテーションを行い，2日目には『素晴らしきかな，人生』を上映し，上映後に同作品について担当者がプレゼンテーションを行った。会場内には，4作品の研究成果について1作品につき3枚ずつのパネルを作成し，展示発表した。

1階のデッキ部分は「Studio B. US」（ハッスルしもきたが運営）と名付けられ，来場者参加型企画として「大切な人へ向けた愛のメッセージ」をハート型の付箋に記入してもらい，それをボードに掲示し，参加者には無料でホット・チョコレートを配付した。

広報手段として，チラシを作成・配布し，1回目に作成したチョコレート映画祭のアカウントで Twitter への書き込みを行い，Instagram を新たに開始し，動画や写真投稿を積極的に行った。また，映画祭メイキング動画を作成し，研究発表の合間に流し続けた。

以下に，パンフレット内容を記す。

#### ご挨拶

本日はチョコレート映画祭にご来場いただき，誠にありがとうございます。／私たちは昭和女子大学 現代教養学科の3年生です。「メディア表象論演習」というゼミ活動の一つとしてプロジェクトを進めてきました。／下北沢は演劇や映画などが盛んな個性溢れる文化のまちであり，／メディア表象について研究する上でとても興味深いまちです。／しもきた商店街振興組合の皆様のご協力を得て，この映画祭が実現しました。／バレンタインのこの時期に，愛に溢れたさまざまな作品からの“愛”を受け取ってください。

#### スケジュール

##### 2.11 (Sun)

- 13：00 開場
- 15：00 『最強のふたり』研究発表
- 16：00 『リリーのすべて』研究発表
- 17：00 『湯を沸かすほどの熱い愛』研究発表
- 18：00 閉場

##### 2.12 (Mon)

- 13：00 開場
- 14：30 『素晴らしきかな，人生』上映
- 16：10 『素晴らしきかな，人生』研究発表
- 18：00 閉場

#### 『素晴らしきかな，人生』

2016年にアメリカ合衆国で公開されたドラマ映画。主人公ハワードはニューヨークの広告代理店で成功を収めて充実した生活を送っていたが，最愛の娘を失ったことで大きな喪失感を抱き，自分の人生を見失っていた。心配になった同僚3人は，「愛」・「時間」・「死」をキーワードに，奇妙な舞台俳優3人に演技の依頼をし，ハワードの心に変化を起こそうとする。／研究としては，一つ目に各シーンから読み取れる「愛・時間・死」の役割について，二つ目にハワードとサイモンの対照的な死について，三つ目に映画の原題である“幸せのおまけ”の意味について，考察を行った。

### 『最強のふたり』

2011年に公開されたフランス映画。スラム出身で貧しく荒れた生活を送る黒人ドリスと、裕福な生活をしながらも頸髄損傷の障がい者に苦しむフィリップ。対照的なふたりが出会い、互いの人生に影響を与え合いながら成長していく。／研究では、テーマのひとつである障がい者に対する差別について、作中の障がい認識とドリスの行動を比較し、ドリスのどのような行動がフィリップの心情を変えたのか、ドリス自身はどう成長したのかということに着目、また作中の音楽をふたりの関係性や心の変化に照らし合わせ、映画における“音楽の力”についても対象とした。最後に、なぜふたりは「最強」なのかを原題『Intouchable』の意味とともに考察した。

### 『リリーのすべて』

日本では2016年に公開。世界初の性別適合手術を受けた主人公アイナーと、その妻ゲルダとの愛を描いた実話とされる。風景画家であるアイナーは、肖像画家の妻ゲルダの絵のモデルをしたことをきっかけに、自己の中に眠る女性（リリー・エルベ）の存在に気がつく。自己の性の矛盾に悩むアイナーであったが、やがて女性リリーとして過ごす時間が増えていく。一方、妻ゲルダは変わりゆく夫に戸惑い、夫を失う悲しみに打ちひしがれるが、リリーの存在を次第に受け入れていく。アイナーは心身ともに、誰もが認める完全な女性になるべく世界初の性別適合手術を受ける覚悟を決め、ゲルダもそんなアイナー（＝リリー）を支え続けることを決意する。2人の命がけの「愛」を描いた作品である。／研究では、①アイナーがリリーになるために行動を起こしたのはなぜか、②アイナーがリリーとして目覚めてゆくにつれて絵を描くことができなくなったのはなぜか、③ゲルダはリリーをどのように受け入れていくのか、という3点に焦点を絞り考察していく。

### 『湯を沸かすほどの熱い愛』

2016年に公開された中野量太監督のデビュー作品で、第40回日本アカデミー賞では6部門の受賞をした。主人公・双葉の夫が行方をくらまし、家業の銭湯は休業状態になっていた。双葉は、持ち前の明るさと強さを発揮して働きながら娘を育てていたが、ある日突然「余命わずか」という宣告を受け、双葉は死ぬまでに絶対にやっておくべきことを決める。それらを実現するために双葉が取る行動は、家族からすべての秘密を取り払うことになり、家族がぶつかり合いながら、

また周囲の人間にも影響を与えながら、より強い絆でみんなが結びついていくというストーリーである。／映画の中で重要な意味を持つと思われる①双葉によって周囲の人たちはどのように変化したのか、②映画の所々にちりばめられた赤が意味するものは何か、③タイトルが意味しているものは何なのか、という3点について考察を行った。

### ②考察

映画のテーマを「愛」に決定。邦画1本と洋画3本を選定。映画を選ぶにあたっては、学生がランダムにテーマに添った映画を挙げるが、どの学年にも共通するのが、洋画が多いことである。この回では実に多様な愛を描く良作を選定することができた。

参加学生は、自分たちでどのような映画祭にしたのか意見交換を活発に行い、熱心に取り組む学生が多かったことで、1回目から新たに導入したことが複数あった。1階から3階まで楽しみながら階段を上がる工夫として、階段アートを作成したこともその一つである。Twitterは前年度に開始していたが、新たにInstagramを始め、担当の学生は毎日のように写真をアップした。下北沢の駅から会場までの行き方を動画でアップする工夫も行った。広報として、チラシを作成して必修授業や秋桜祭、オープンキャンパスでも配布し、下北沢の店舗や本多劇場、昭和信用金庫にも設置を依頼した。

メンバーの一人に演劇好きの学生がいたことが、活動を推進する大きな力になっていたと考えられる。下北沢周辺でチラシ設置可能な店やスペースを自ら探し歩き、Instagramの更新も積極的に行った。この学生は、卒業論文のテーマに寺山修司を取り上げて非常に熱心に取り組み、学科全教員の審査を経て「秀」の評価を得た。

### ■第3回「チョコレート映画祭2019」

(2019年2月10日・2月11日)

#### ①概要

- ・参加学生：3年ゼミ生11名、1年生13名
- ・テーマ：「愛」
- ・研究対象映画：『チョコレート・ドーナツ』『空中庭園』『永い言い訳』『幸せへのキ

セキ』『世界一キレイなあなたに』

- 上映映画：『チョコレート・ドーナツ』
- 来場者数：約 150 名

※昭和デザインオフィス認定プロジェクトとして実施

この回から、3年ゼミ生だけでなく1・2年生にも参加を呼びかけたところ、ゼミメンバー11名に13名が加わり、24名となった。映画作品や係の担当を決めてグループ分けを行い、授業後に活動の時間を設けて、ゼミメンバーを中心に作業を進めた。参加人数の増加に伴い、研究対象作品を前回から1作品増やして5作品とした。

1階の参加型イベント会場から3階の展示会場までをどう繋ぐかが毎回の課題だが、前回2回と同様、参加型イベントで「オススメの映画」か「伝えたい人へのメッセージ」を記入した参加者に無料でホット・チョコレート・ドリンクを配り、3階の会場へと誘導した。3階の会場では、オリジナル・クリアファイル(A5)にパンフレットとアンケートを挟み込んで配付した。階段には、映画のタイトルとイメージ図を用いた階段アートを作成し、手すりにもモールで装飾を施した。階段手すりからパネルを下げ、映画祭会場が3階であることを分かりやすくするなどの工夫も行った。

また、無料配付のホット・チョコレート・ドリンクに加えて、映画祭限定オリジナルドリンク3種類をEXPRESSER、上映映画『チョコレート・ドーナツ』に因んだ3種類のドーナツをanthrop.に依頼、学生は販売のみ行った。

以下に、パンフレット内容を記す。

ご挨拶

本日はチョコレート映画祭 vol. 3 にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。このイベントは昭和女子大学 現代教養学科「メディア表象論演習」ゼミが、しもきた商店街振興組合の皆様のご協力を得て、実現したものです。チョコレート映画祭は、下北沢の劇場をお借りして空間や人の動きをデザインするとともに映画の研究発表から様々な「愛」の形について考え、映画の新しい捉え方や魅力に気づいてもらいたいという思いを込めて開催しています。どうぞバレンタインシーズンに「愛」で溢れる2日間をお楽し

みください。

スケジュール

2月10日(日)

13:00 OPEN

14:00 『空中庭園』研究発表

15:00 『幸せへのキセキ』研究発表

16:00 『世界一キレイなあなたに』研究発表

17:00 『永い言い訳』研究発表

18:00 CLOSE

2月11日(月・祝日)

13:00 OPEN

14:30 『チョコレート・ドーナツ』上映

16:15 『チョコレート・ドーナツ』研究発表

18:00 CLOSE

『空中庭園』

2005年に公開され、第27回ヨコハマ映画祭2005年度日本映画ベストテン第8位、第18回日刊スポーツ映画大賞主演女優賞(小泉今日子)受賞作品。原作は角田光代の小説『空中庭園』。主人公・絵里子が決めた「何事もつつみ隠さず、タブーをつくらず、できるだけすべてのことを分かち合う」というルールのもとで家族といってもそれぞれ独立して暮らす京橋一家。しかし、家族にはそれぞれ秘密があった。正しい家族の形とは何なのか、この映画を通して自分の家族はどうなのか、といった家族愛について考えさせられる。研究では、タイトル『空中庭園』の意味と、印象的な場面の映像分析に焦点をあて、考察を行った。家族といってもそれぞれ独立した個人の集団がお互いを尊重すること、愛を伝えることの難しさなど、多くを考えさせられる作品。

『幸せへのキセキ』

2011年に原題『We Bought a Zoo』がアメリカで公開。日本では2012年に『幸せへのキセキ』として公開された。コラムニストのベンジャミン・ミーを主演にした実話に基づく映画である。コラムニストのベンジャミンは、妻を亡くして以来、傷心し前に踏み出すことが出来なかった。父子家庭となり家族との関係もうまくいかなくなっていたベンジャミンは、郊外へ引っ越して家族の再出発を目指す。そこで、選んだ物件には閉園している動物園が付いていた。ベンジャミンは、園長として動物園の再開を計画しながら家族との絆を深めていく。研究は、この作品のキーとなる「勇氣」に注目を置き、ベンジャミンとディランをは

はじめとした登場人物たちの行動を分析し、心の変化についてまとめた。また、原作と邦題の違いについても考えた。

#### 『世界一キライなあなたに』

2016年に公開されたアメリカ・イギリスの合作映画。原作の小説は2012年に発表された。平凡だが明るく暮らしていた女性ルーと、大富豪で順風満帆な生活を送っていたが、事故で車椅子生活を余儀なくされ、安楽死を望むようになった青年ウィルが会う。ルーはウィルとの日々を通じて人生の楽しみ方や愛を知る。／研究では、ルーとウィルの人生を通して、ルーとウィルが惹かれあった理由、ルーとウィルの2人の選択、『世界一キライなあなたに』に込められた愛のメッセージについて考察した。ルーの個性あふれるファッションや、ウィルとルーの選んだ人生について考察した。

#### 『永い言い訳』

映画『永い言い訳』は、2016年に公開された日本映画である。西川美和監督が、第153回直木賞候補にもなった自著を自らの脚本、監督により映画化した。妻が旅先で事故に遭い親友とともに亡くなったという知らせを受けるが、悲しみに暮れる可哀そうな夫を演じることしかできない人気作家の主人公と、その妻の親友の遺族である親子の交流と成長を描いた物語だ。主演を本木雅弘が務め、その脇を竹原ピストルや深津絵里らが固める。／私たちはこの作品を、小説版『永い言い訳』や西川美和監督作品『夢売るふたり』と比較しつつ、心が冷え切った主人公が失敗から得た学びや愛を知るまでの過程の描かれ方をテーマに研究した。

#### 『チョコレートドーナツ』

2012年にアメリカで公開され、シカゴ国際映画祭をはじめ、多くの観客賞を受賞。日本では2014年に公開され、「LGBT」「ゲイ」をテーマに「愛」を考える映画となっている。ゲイカップルのルディとポールは、母親から十分な愛を受けずに育ったマルコを養育しようとする。ダウン症のマルコに精一杯の愛を注ぐルディとポールであったが、2人がゲイであることが周囲の人に知れ渡る。その結果、養育環境が不適切だとしてマルコと引き離され、同性愛やダウン症への差別による苦しみを味わう。／研究では、マイノリティに焦点をあて、「LGBTとダウン症を取り扱った理由」を考察した。それと関連し、何故タイトルを『チョコレートドーナツ』にしたのかについても考えていく。

## ②考察

学生の参加人数が増えたことで、作業のスケジュール調整がさらに困難になることは目に見えていた。そのためグループ作業を中心にしたが、熱心に取り組む学生とそうでない学生との差が出た。さらに、全体の取りまとめは難しい作業であり、学生にはリーダーシップやコミュニケーション能力、計画性など当たり前に必要な力のほかに、協働する社会人との間で臨機応変に対応する力や、計画を状況に合わせて修正していく柔軟性などが要求され、これまで見えなかったことに多く気づかされた回となった。

同じ映画祭でも、中心となるゼミのメンバー構成によって、回ごとに特色が変わり、指導方法にも工夫が必要であることを実感した。

## ■第4回「チョコレート映画祭2020」

(2020年2月9日)

### ①概要

- ・参加学生：3年ゼミ生11名、3年生2名
- ・テーマ：「愛—出会いと別れ—」
- ・研究対象映画：『母と暮らせば』『あん』『マーサの幸せレシピ』『グリーンブック』
- ・上映映画：『あん』
- ・来場者数：約100名

過去3回の映画祭を経て、テーマは開催時期のバレンタインデーに合わせて「愛」に定着してきたが、オリジナリティを出すためのサブタイトルを「出会いと別れ」とした。研究対象とする映画の選定については、顧問も含むメンバー全員が候補作を挙げ、自分が推薦する映画についてプレゼンテーションをして決定した。これまで同様、アニメーション・ドキュメンタリー・ミュージカルを除く「劇映画」とし、洋画と邦画のバランスを考え、それぞれ2本ずつ合計4本とした。研究対象作品は『母と暮らせば』『あん』『マーサの幸せレシピ』『グリーンブック』、上映作品は『あん』に決定した。メンバーは、3年ゼミ11名のほかに参加希望の3年生2名を加え、13名であった。

これまで同様、1階デッキで参加型イベントで集

客し、3階の会場まで誘導、映画祭来場者にはロゴ入りサコッシュにパンフレットを入れて、ハート型チョコレートと一緒にプレゼントした。スタッフは、揃いのロゴ入りウインドブレーカーを着用して対応した。

この回での変化は、これまで連休を利用して2日間の開催としてきたが、この年は連休とならなかったため、1日の開催とした点である。

以下に、パンフレット内容を記す。

#### ご挨拶

本日は第4回チョコレート映画祭にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。／今年のテーマは「愛—出会いと別れ—」です。このイベントは、昭和女子大学 現代教養学科の「メディア表象論演習」3年ゼミ生と有志のメンバーで企画し、しもきた商店街振興組合の皆様のご協力を得て、実現しました。／バレンタイン・シーズンにふさわしいテーマを設定し、映画を4作品選定してグループごとに研究を進めてきました。皆様にとって新たな映画の魅力発見のヒントになれば幸いです。／それでは、どうぞチョコレート映画祭をお楽しみください！

#### スケジュール

2月9日（日）

11:00 Open

12:30 『マーサの幸せレシピ』 研究発表

13:00 『母と暮せば』 研究発表

13:30 『グリーンブック』 研究発表

14:00 『あん』 上映

16:00 『あん』 研究発表

18:00 Close

#### 『あん』

2015年に公開された本作は、『萌の朱雀』をはじめ国際映画祭で多くの受賞作がある河瀬直美が、ドリアン助川の原作小説『あん』を映画化し、第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門のオープニング上映作となった。本作が生前最後の主演となった樹木希林は、第39回日本アカデミー賞優秀主演女優賞を受賞し、実の孫との共演でも話題になった。／千太郎が雇われ店長を務めるどら焼き屋「どら春」に、働き口を求めて徳江がやって来る。最初は断るが、徳江が持参した粒あんの美味しさに衝撃を受け、雇うことにする。店

は行列ができるほど繁盛したが、徳江がハンセン病であることが噂されると客足は急速に遠のき、徳江は「どら春」から去ってしまう。店の常連ワカナと千太郎は、徳江の住んでいる療養所を訪ね、徳江からハンセン病として生きてきた話を聞く。千太郎は徳江を店で守れなかったことを悔やみ、「誰にでも生きている意味がある」ということを教えられる。／シナリオどおりの順撮りで、自然の繊細な描写や音の効果が随所に生かされ、河瀬監督ならではの特色ある映像作品となっている。／研究発表では、監督の撮影のこだわり注目。徳江との出会いによる千太郎の内面の変化と「音」の関係に焦点を当てて考察し、印象的な自然描写の映像にも着目して分析を行った。最後に、映画『あん』が伝えたかったこと、「出会いと別れ」についてまとめた。

#### 『マーサの幸せレシピ』

2001年公開のドイツ映画。原題は『Bella Martha』。日本では2002年に『マーサの幸せレシピ』のタイトルで公開された。／ドイツ・ハンブルクにあるフランス料理店を舞台とした物語。主人公の女料理長・マーサの作る料理は常に完璧だったが、彼女は自分の料理を認めない客に暴言を吐き、職場の仲間たちと共に食事を摂ることもしない。なかなか人に心を開くことのなかった彼女が、2つの出会いをきっかけに変わっていく。／マーサを初めとする登場人物の心境の変化や、今回の映画祭のテーマ「出会いと別れ」に着目し、マーサが閉ざしていた内面を開いて人の心の温かさに気づき、忘れかけていたものを取り戻していく過程について、シーンごとに流れを捉えながら考察した。また、2007年にアメリカでリメイクされた『幸せのレシピ』と比較をして両作品の違いを考察し、『マーサの幸せレシピ』の演出が『幸せのレシピ』にどのような影響を与えているのか等について分析した。

#### 『母と暮せば』

2015年に公開された日本映画。『男はつらいよシリーズ』で知られる山田洋次監督が、生前交流のあった脚本家井上ひさしの意思を引き継いで映画化した。松竹創立120周年を記念して作られ、第89回アカデミー賞・外国語映画賞部門、日本代表にも選ばれた。／原爆によって一瞬のうちに息子浩二を失った伸子は、その死を受け入れられずにいたが、そろそろ諦めようと思ったところに浩二の霊が現れ、二人は毎日思ひ出話をするようになる。浩二の幼なじみで恋人でもあった町子もまた伸子と同様に浩二を忘れられずにいたが、



新しい相手を見つけ結婚を考えるようになる。やがて伸子の身体は弱り、浩二のもとへと召されていく。／本作は長崎で全て撮影され、家族が生活する「家」のシーンを軸に話は展開していく。戦争直後の長崎を舞台に、戦争が残した傷跡を親子の絆を軸に母の視点から描いた山田洋次監督初のファンタジー作品である。／山田洋次監督のインタビュー記事や対談記事等を参考に、映像描写の特色や音楽に注目して映画が何を伝えようとしたのかを考察し、『母と暮せば』における家族観、親子の関係、映画祭のテーマである「出会いと別れ」という観点からまとめた。

#### 『グリーンブック』

2018年にアメリカで公開され、2019年に日本で公開されたアメリカ映画。第91回アカデミー賞で作品賞など3部門を受賞した他、第76回ゴールデングローブ賞など様々な賞を受賞した話題作。／黒人ピアニストのドクターとイタリア系アメリカ人トニーが、差別の色濃いアメリカ南部への演奏旅行に挑む、実話をもとに描かれた感動コメディである。黒人を嫌っていたトニーは、ある日、黒人天才ピアニスト・ドクターの運転手として雇われる。ガサツなトニーと教養あるドクターは、価値観の違いから最初は反発しあっていた。しかし旅を通してお互いを理解し合って友情を深め、人種差別や性差別など様々降りかかる困難な状況を乗り越えていくという友情物語である。／研究発表では、当時の法律や時代背景を調べ、登場人物の心情がトラブルのたびにどのように変化するのか、友情が育まれる課程に注目して分析した。また、映画に対する賛否両論の批評から、この映画が伝えたかったことについて考察した。

## ②考察

この回は上映映画として顧問である筆者が『あん』を推し、全員で鑑賞して賛成を得た。推薦理由の一つは、映画作品として素晴らしく、評価が高いことはもちろんのこと、日本を代表する女性監督の作品であることだ。1997年『萌の朱雀』で史上最年少のカンヌ国際映画祭カメラドール（新人監督賞）を受賞、『殞の森』ではカンヌ国際映画祭グランプリを獲得し、国際的にも高い評価を受けており、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会公式映画監督を務めることも決定していた。加えて、2019年12月から2020年1月にかけて、「国立映画

アーカイブ」で初の特集「映画監督 河瀬直美」も生まれ、トークイベントも同時に予定されていた。（筆者は12月25日の上映会、トークイベントに参加。本学は、大学・短期大学・高等専門学校等を対象に国立美術館などが設けた「キャンパスメンバーズ」の会員である。）また、本作は2016年キネマ旬報ベスト・テン読者選出日本映画ベスト・テン第3位に選ばれた話題作でもあった。主演は2018年9月に亡くなった樹木希林で最後の出演作であり、親友役の市原悦子も2019年1月に他界、その意味でも話題性があった。

もう一つは、主人公がハンセン病患者であることだ。近年まで国が誤った政策（隔離政策）を取り、現在も差別問題、強制不妊手術などの訴訟が行われている。1996年に漸く「らい予防法」が廃止され、2016年には元患者の家族らが熊本地裁に起こした集団訴訟で国は熊本地裁の判決を認め謝罪、賠償金を支払うなど大きく前進したものの、残された課題は多い。筆者は「瀬戸内国際芸術祭2019」で、日本全国で13カ所ある国立ハンセン病療養所の一つで芸術祭の会場ともなった「大島青松園」を訪れ、アート作品として展示されたハンセン病関連の作品を見ていた。施設の見学ツアーに参加し、ハンセン病について改めて学んだこともあり、社会問題を考える学科にふさわしい作品であると判断した。

映画の内容について筆者が学生に説明した時点では、ハンセン病は映画祭にはテーマが「重すぎる」「暗い」という意見があった。しかし、全員でまずは鑑賞し、ハンセン病を全面に押し出した映画ではなく、万人に「生きる」ことの意味を問いかけた映画であることを理解すると、上映に賛成する学生が現れた。さらに、映画を評価する観点は、テーマだけではなく、一つ一つのカットが持つ表現力や、音、撮影技法にもあることなど、映画の見方を学びなおすことで、全員から賛成が得られたのである。毎回、研究対象映画は全員が鑑賞し、ディスカッションを行っているが、『あん』を通じては特に多くのことを学んだ。

プロジェクトとして教員があまり介入することは避けたいと考えてきたが、映画を専門に学んでいない学生だけでは判断に難しい点や偏りがどうしても

生じる。学生を主体としながらも、「学び」を考えたときに教員が適切に介入することも必要であることを再認識した。

## ■第5回「チョコレート映画祭 2021」 (2021年2月14日(日)開催予定)

### ①概要

- 参加学生：3年ゼミ生12名，2年生1名，1年生4名
- テーマ：「愛」
- 研究対象映画：『君の名前で僕を呼んで』『愛がなんだ』『レオン』『そして父になる』
- 上映映画(予定)：『そして父になる』

### ②準備状況

- 1作品につき，3枚のパネルを作成済み。1枚目は作品概要(監督・主なキャスト・製作会社・製作年・受賞歴など)。2枚目は人物関係図，作品の特色，映像分析など。3枚目は2枚目の続きのほか，テーマ分析，まとめなど。
- 各作品とも発表用のパワーポイントを作成。発表時間は1作品につき25分を予定。
- Instagramで情報発信中。
- コロナ感染状況により，Zoomによるオンライン開催を検討中。

研究発表の前に，「チョコレート映画祭」の意味や目的，プロジェクトとしての活動内容，例年の開催状況を写真を交えながらパワーポイントを用いて説明。

メイキングから当日までを編集した昨年の動画を流して，準備状況やイベント当日の様子を伝える。

発表と発表の間で，映画や下北沢にまつわるクイズ出題を検討中。

オンラインならではのメリットを活かし，文化のまち下北沢の歴史や現在について，イベントや商店街の写真を用いて紹介するなど，まちの魅力を参加者に発信していく予定。

## 5. おわりに

現代教養学科では，所属教員の多様な専門性によって，複数の場所で多彩なプロジェクト活動を展開

している。2019年度から学科専門科目「CLAプロジェクト」として単位化し，第4回目にあたる「チョコレート映画祭2020」はその対象として授業に組み込まれた。

また昭和女子大学の100周年学術研究の一つとして，学科で取り組む「女性のリーダーシップ育成ーPBLを通じたリーダーシップの養成ー」が採択され，プロジェクトを通じた学習がリーダーシップ育成に有効であるかどうかを探求することにもなった。その測定にはZ会ソリューションズの「課題発見解決能力テスト」，「コミュニケーションスキルテスト」なども取り入れ，統計的な分析も継続中である。

科学技術，映像技術の発展により，メディア文化は大きく変貌を遂げ，その影響を受けてハイカルチャーとサブカルチャーの境界は揺らぎ，様々な状態でメディアミックス化が進み，文化の価値観はかなり変化してきている。溢れる情報から関心事をピンポイントで検索することに習熟した若者世代は，興味関心を局所化する傾向にある。このような時代において，芸術文化の価値や意味をどのように若い世代に伝えれば良いのか。芸術文化が伝統として生活に根付くヨーロッパと違って，難しさがある。1年次の必修授業「文化をみる目」を10年以上担当してきたが，学問として「文化」を学ぶことに関心のない学生は少なからず存在している。

しかし，近年，芸術に対する捉え方には変化が見られる。災害からの復興を目的に湯布院から始まった地方の映画祭は今や日本全国で開催され，ジャンルも多様な映画祭が世界各国で誕生している。また，美術においては屋内の美術館のみならず屋外での展示を含めて開催される芸術祭・アート・プロジェクト等も広がりを見せる。音楽においては，1995年にフランスのナントで創設された(創設者ルネ・マルタン芸術監督)「ラ・フォル・ジュルネ」を皮切りに，一流のクラシック音楽を低料金化・時間短縮の工夫をするなど，コンサート形態の常識を取り払った音楽祭，あるいはオリジナリティのある音楽祭が世界各地，日本各地で開催されている。

つまり，ハイカルチャー・サブカルチャーを縦の境界とするならば，横の境界とも言える映画・美

術・音楽といったジャンル別の境界もまた新たな価値観によって（良い意味で）曖昧になり、さらに、芸術は単なる芸術だけの問題にとどまらず、まちおこしや地域活性化などの経済や人口、環境問題などを視野に入れた、まさにサステナブルな動きと直結したものとなりつつある。

また、2020年初頭から世界的に流行しているコロナ禍の状況下では、さらに文化に対する価値観は変容し、新たな世界観が求められている。

現代教養学科は、学際的な学科ならではの幅広さはあるものの、専門性に欠けるという弱点がある。それを授業あるいは授業外の講座や研修でいかに補うかが課題である。しかし、幅広い教養の下地とそれに対応できる柔軟性があり、課題解決の可能性は充分にあると考える。プロジェクトを中心としたPBLは、現代教養学科にとって座学で身につけた学びを生かす機会であると同時に、学びの場を広げ、リーダーシップやコミュニケーション力、課題発見や解決能力を磨く機会となっていることは確かである。情報が局所化しがちな現代社会だからこそ、枠組みを取り払った発想力や創造力、それに対応する力が求められている。その一つとしてプロジェクト学習は大きな効果があることを、プロジェクトを通して証明できていると考える。

## 【謝 辞】

世田谷区 生活文化部 文化・国際課 文化行政担当（現、生活文化政策部 文化・芸術振興課）北はやと様・伊藤幸浩様、公益財団法人せたがや文化財団 世田谷文化生活情報センター 生活工房 黛和晃様・斎藤直子様、公益財団法人せたがや文化財団世田谷文化生活情報センター 音楽事業部 楠瀬寿賀子様・川島英樹様、世田谷文学館 瀬川ゆき様、公益財団法人大宅壮一文庫 加瀬博通様・黒沢岳様、公益財団法人賀川事業団 雲柱社 賀川豊彦記念 松沢資料館 加山久夫様・杉浦秀典様、東宝株式会社 東宝スタジオ 谷本一郎様・富田修様、日本放送協会放送技術研究所 青柳和久様・東山武明様・宮田祐吉様、徳富蘆花研究家 渡邊勲様、昭和信用金庫 神保和彦様・秋山祐介様・水上浩介様、エフエム世田谷 奥延方恵様・中戸川宏平様・鎌田梓様・山下鮎美様・太田良様、しもきた商店街振興組合 小清水克典様、久保寺敏美様 ほか多くの皆様にお世話になった。記してお礼

申し上げる。

## 【活動記録】

### ◇「芸術散歩」

（世田谷区・生活工房・昭和女子大学現代教養学科）  
コース1「小さい秋をみつけて楽しむ旅～散歩ワークショップ～」(鶴田佳子) 2012年11月17日(土)  
コース2「映像の進化を見る！～過去から未来へ～」(福田淳子) 2012年11月17日(土)  
コース3「文学者が築いた“社会”との絆を探る～“アナログ”と“デジタル”の魅力～」(福田淳子) 2012年11月24日(土)

### ◇エフエム世田谷「商店街東奔西走！」

（エフエム世田谷・昭和信用金庫・昭和女子大学）  
オープニング ゲスト：昭和女子大学学長（当時）坂東眞理子先生  
収録 2015年8月26日(水) 16:00～17:00  
放送 2015年9月4日・11日・18日・25日  
第1回 ゲスト：東洋興業株式会社専務取締役、しもきた商店街振興組合副理事長、まちづくり委員長 小清水克典氏  
インタビュー 2015年11月11日(水) 18:00～19:00  
於：東洋興業株式会社 事務所  
収録 2015年11月30日(月) 16:45～17:45  
放送 2015年12月4日・11日・18日・25日  
第2回 ゲスト：一般財団法人世田谷トラストまちづくり理事長 春日敏男氏  
インタビュー 2016年1月13日(水) 15:30～16:30  
於：北沢タウンホール  
収録 2016年1月25日(月) 18:00～19:00  
放送 2016年2月5日・12日・19日・26日  
第3回 ゲスト：三軒茶屋銀座商店街振興組合理事長、株式会社三恵代表取締役 飯島祥夫氏  
インタビュー 2016年9月20日(火) 13:00～  
於：株式会社三恵 事務所  
収録 2016年11月15日(火) 18:30～19:30  
放送 2016年12月2日・9日・16日・23日・30日  
第4回 ゲスト：株式会社旭鮎本店 代表取締役 丹羽豊氏  
インタビュー 2017年1月6日(火) 18:45～19:45  
於：旭鮎本店本部（世田谷区赤堤）  
収録 2017年1月16日(木) 18:30～19:30  
放送 2017年2月10日・17日・24日、3月3日・10日  
第5回 ゲスト：株式会社加賀屋商会（クリーニング スワロー）代表取締役 石村正人氏  
インタビュー 2017年9月13日(水) 9:30～10:30  
於：(株)加賀屋商会本社（世田谷区船橋）

収録 2017年11月17日(金) 18:30~19:30  
 放送 2017年12月1日・8日・15日・22日・29日  
 第6回 ゲスト: 本多グループ代表 本多一夫氏  
 インタビュー 2017年12月8日(金) 17時~  
 於: 本多劇場 社長室  
 収録 2018年1月22日(月) 18:30~19:30  
 放送 2018年2月9日・16日・23日, 3月2日・9日  
 第7回 ゲスト: 株式会社デジタルステージ代表取締役  
 熊崎隆人氏  
 インタビュー 2018年10月5日(金) 17:00~18:00  
 於: ものづくり学校内 株式会社デジタルステージ  
 収録 2018年11月12日(月) 18:30~19:30  
 放送 2018年12月7日・14日・21日・28日  
 第8回 ゲスト: 日本学園校長 水野重均先生  
 インタビュー 2018年11月26日(月) 18:30~19:30  
 於: 日本学園 校長室  
 収録 2019年1月18日(金) 18:30~19:30  
 放送 2019年2月1日・8日・15日・22日  
 第9回 ゲスト: せたがや梅まつり実行委員長 齋田孝氏  
 インタビュー 2019年11月8日(金) 19:00~20:00  
 於: 齋田氏宅  
 収録 2019年11月11日(月) 17:30~18:30  
 放送 2019年12月6日・13日・20日・27日  
 第10回 ゲスト: 社会福祉法人児玉新生会児玉経堂病院  
 理事長 児玉健氏  
 インタビュー 2019年11月26日(火) 18:50~19:50  
 於: 児玉経堂病院 食堂  
 収録 2020年1月20日(月) 18:45~19:45  
 放送 2020年2月7日・14日・21日・28日

#### ◇「チョコレート映画祭」

主催: 昭和女子大学 人間社会学部 現代教養学科 福田研究室「メディア表象論演習」

協力: しもきた商店街振興組合・株式会社ハッスルしもきた・下北沢大学実行委員会

会場: しもきた DAWN (映画上映・研究発表・研究パネル展示)

Studio B. US Shimokitazawa (参加型イベント)

第1回「チョコレート映画祭 2017」(2017年2月11日・2月12日)

第2回「チョコレート映画祭 2018」(2018年2月11日・2月12日)

第3回「チョコレート映画祭 2019」(2019年2月10日・2月11日)

第4回「チョコレート映画祭 2020」(2020年2月9日)

#### 【参考文献】

・『ふるさと世田谷を語る ―祖師谷・成城・喜多見―

(世田谷区生活文化部文化・国際・男女共同参画課, 平成10年3月)

- ・野田邦弘『文化政策の展開 アーツ・マネジメントと創造都市』(学芸出版社, 2014・4)
- ・河村建夫, 伊藤信太郎編著『文化芸術基本法の成立と文化政策 真の文化芸術立国に向けて』(水曜社, 2018・3)
- ・渡部薫『文化政策と地域づくり 英国と日本の事例から』(日本経済評論社, 2019・3)
- ・本多一夫・徳永京子『「演劇の街」をつくった男 本多一夫と下北沢』(ぴあ, 2018・10)
- ・文化庁 <https://www.bunka.go.jp/>
- ・東京都生活文化局文化振興部 村田陽次「東京都ホール・劇場等連携フォーラム 2018~豊かな創造・鑑賞・参加の場を共につくるために~都内・首都圏のホール・劇場等を巡る現状」[https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/bunka/bunka\\_seisaku/files/0000001272/4currentsituation.pdf](https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/bunka/bunka_seisaku/files/0000001272/4currentsituation.pdf)
- ・世田谷区 <https://www.city.setagaya.lg.jp/index.html>
- ・せたがや文化財団 せたがやアーツナビ <https://www.setagaya-bunka.jp/>
- ・NHK 放送技術研究所 <https://www.nhk.or.jp/str/>
- ・東宝株式会社 東宝スタジオ <https://www.tohostudio.jp/top.html>
- ・大宅壮一文庫 <https://www.oya-bunko.or.jp/>
- ・賀川豊彦記念松沢資料館 <https://t-kagawa.or.jp/>
- ・世田谷文学館 <https://www.setabun.or.jp/>
- ・ぴあ総研 <https://corporate.pia.jp/csr/pia-soken/>
- ・本多劇場グループ <http://www.honda-geki.com/>
- ・独立行政法人国際協力機構 (JICA) <https://www.jica.go.jp/index.html>
- ・NGO ACE <http://acejapan.org/>
- ・日本チョコレート・ココア協会 <http://www.chocolate-cocoa.com/>
- ・森永製菓株式会社 <https://www.morinaga.co.jp/>
- ・『バレンタイン一揆』 <http://acejapan.org/campaign/15th/>

(最終アクセス日は全て2020年8月31日)

(ふくだ じゅんこ 現代教養学科)